

～ 〈 3.11 以 降 〉 読 書 会 を 進 め る に あ た っ て ～

【この読書会が目指すこと】

- 他人と出会うこと。自分と他人の違いに気づくこと（読書会の理念参照）
⇒なぜ重要か？——ふだん隠されているにすぎない対立を自覚することになるから。
- さらにその対立を固定化せず、関係そのものが変わる経験を積める場でありたい。
⇒そのための「対話」。

【対話とは何か？】

- 対話とは何でないか。
 - 「討議」：自分の意見も相手の意見も変更を許さず、そのうえで自分の意見が相手の意見より正しいことを証明することを目的とする言葉のやりとりではない。
 - 「雄弁術」：自分の意見を相手に納得させる（「御理解頂く」）ことを目的とする言葉のやりとりではない。

⇒いずれも相手が自分と同じ意見になることを目指す。

- 対話とは、自分と相手の変化と異質性を前提とした言葉のやり取り。
⇒自分の意見を述べる時は、それが絶対でないことを前提。
 - 言い換えれば、いつでも他人にその間違い・矛盾を指摘される用意がなければならぬ。
 - ただし自分の意見が「絶対でない」ことを前提するからといって、常に「あくまで私はこう思います」という仕方意見で述べればいけない。「私の感想・感情なのだから他人にどうこう言われる筋合いはない」という気持を抱いてしまえば、結局自分が変わることはありえない。

⇒絶対に正しい意見などありえず、自分も相手も常に意見が変わる可能性を残すのだから、両者がひとつの同じ意見を持つようになることは「対話」にとってもいいこと。自分と相手が「違う」ことから始まって、「同じ」になることを目指さない「対話」は、自分と他人の“異質性”を常に前提におきながら進む。

【具体的に心がけて欲しいこと】

《質疑応答について》

- 発言者にたいして「もうすこし詳しく」、「それはどういうことか?」、さらには「もう一度同じことを言ってもらえませんか?」と尋ねていい。
☆こうした質問は、相手の言っていることが間違っていると思って投げかけられるのではない。純粹に、当の発言を「もっとよく理解したい」から疑問が投げかけられる。
- とはいえ、自分の言っていたことが、他人からあらためて尋ねられた途端に分からなくなることは多々ある。
☆会議のプレゼンや研究発表でこうなったらマズいかもしれないが、この読書会で「自分の言っていることが分からない」状況に陥っても問題はない。だからそうなる誰も気にする必要がなく、ごまかすために声を荒げる必要もない。それどころかむしろ、そうした状況はわたしたちの「自明性」に反省を促す貴重な体験であるとさえ言える。

《ファシリテーターについて》

- 読書会のファシリテーターは教授ではないしそもそもこの分野の専門家でもありません。ですから対話の内容に関して他の皆さんより優位にあるわけではありません。トランプでいう「ディーラー」ないし「親」のようなものとして捉えて頂ければいいと思います。「親」はトランプを配ったり、集めたりして他のプレーヤーとは異なる役割を担いはしますが、ゲームそのものには一プレーヤーとして参加します。

《解釈フェーズについて》

- 音読することによって「いまからここについて話すんだ」という意識を共有することが目的です。
- 主題について「自分の意見・感想」を述べることを差し控えなくてはならないので、「著者の主張を確認する」という作業は“つまらない”ように思えるかもしれませんが、ここを一端通り抜けない限り、「新しい考え」「新しい視点」「新しい言葉」に出会うことはできません。とはいえ見方を変えれば、逆にそうした新しいものと出会えるこの段階は“面白い”ものと言えるかもしれません。